

開催主旨

中国の歴史上、東晋時代(317-420)と唐時代(618-907)は書法が最高潮に到達しました。書聖・王羲之(303-361)が活躍した東晋時代に続いて、唐時代には虞世南、欧陽詢、褚遂良ら初唐の三大家が楷書の典型を完成させました。しかし安史の乱を境として、唐王朝は大きく揺らぎ始めます。顔真卿(709-785)は三大家の伝統を継承しながら、顔法と称される特異な筆法を創出しました。また、安史の乱の凄惨な思いを紙面に吐露した祭姪文稿は、王羲之の蘭亭序に比肩しうる歴史上の劇跡と称えられます。王羲之や初唐の三大家とは異なる美意識のもとにつちかわれた顔真卿の書は、後世にきわめて大きな影響を与えました。

本展は、書の普遍的な美しさを法則化した唐時代に焦点をあて、顔真卿の人物や書の本質に迫ります。また、後世や日本に与えた影響にも目を向け、王羲之神話が崩壊する過程をたどりながら、改めて唐時代の書の果たした役割を検証します。

展覧会のみどころ

- 1 楷書の美しさ 徹底解析!
- 2 天下の劇跡 「祭姪文稿」の 魅力に迫る!!
- 3 王羲之神話の崩壊 をたどる!!!

開催概要

特別展「顔真卿 王羲之を超えた名筆」 Unrivaled Calligraphy: Yan Zhenqing and His Legacy

会期 2019年1月16日(水)―2月24日(日)

会場 東京国立博物館 平成館 〒110-8712 東京都台東区上野公園13-9 <http://www.tnm.jp/>

開室時間 9:30~17:00 ※金曜・土曜日は午後9時まで ※入館は閉館の30分前まで

休館日 月曜日 ※ただし2月11日(月・祝)は開館、翌12日(火)は休館

主催 東京国立博物館、毎日新聞社、日本経済新聞社、NHK

特別協賛 大和ハウス工業

協賛 信越化学工業、損保ジャパン日本興亜、トヨタ自動車、NISSHA、三菱商事

協力 内田洋行、台東区立書道博物館、毎日書道会

展覧会公式サイト <https://ganshinkei.jp/>

お問合せ 03-5777-8600 (ハローダイヤル)

観覧料(税込)	当日券	前売券	団体券
一般	1,600円	1,400円	1,300円
大学生	1,200円	1,000円	900円
高校生	900円	700円	600円

チケット取り扱い 東京国立博物館正門チケット売場(窓口、開館日のみ。閉館の30分前まで)、展覧会公式サイト、各種プレイガイド。

前売券販売時期 2018年10月17日(水)~2019年1月15日(火)まで

早割ペアチケット 2枚で2,400円(税込)
ペアチケット販売時期:2018年9月19日(水)~10月16日(火)まで
展覧会公式サイト、各種プレイガイドで販売。

※中学生以下無料 ※団体は20名以上 ※障がい者とその介護者1名は無料(入館の際に障がい者手帳などをご提示ください)

表紙 祭姪文稿(部分) 顔真卿筆 唐時代・乾元元年(758) 台北 國立故宮博物院藏

報道関係お問合せ

特別展「顔真卿」
広報事務局(ミューズ・ピアール)
担当 大山、奥村、望月

〒107-0052 港区赤坂9-1-7 赤坂レジデンシャル770
TEL 03-6804-5045 FAX 03-5785-2627
E-mail info@musepr.co.jp

特別展

顔真卿

王羲之を超えた名筆



UNRIVALED CALLIGRAPHY:
YAN ZHENQING AND HIS LEGACY

清	明	元	南宋	北宋	五代十国	唐	隋	北朝	五胡十六国	晋 (西晋)
江戸	安土 桃山	室町	南北朝	鎌倉	平安	奈良	飛鳥	南朝	東晋	古墳 弥生

王羲之
303~361




唐の四大家

虞世南
558~638




顔真卿
709~785




歐陽詢
557~641




褚遂良
596~658




懷素
8世紀後半



楷書の完成

初唐の三大家

虞世南は、王羲之の7世の孫の智永に教えを受けて、王羲之・王献之の正当に根ざした南朝の書法を継承しました。行書にその特色がよく表れ、楷書には温和で落ち着いた用筆の「孔子廟堂碑」があります。

これに対し、**歐陽詢**は北朝の書に基盤を置き、険しさをたたえた書風をよくしました。なかでも、文字の組み立てがきわめて緻密な「九成宮醴泉銘」は、細部にまで神経の行き届いた傑作で、「楷書の極則」と賞賛されています。この作において、楷書は隷書の束縛から完全に解放され、楷書独自の表現を確立しました。

褚遂良の晩年の作「雁塔聖教序」は、細身の線質に華やかさを盛り込んだ、初唐の楷書を代表するにふさわしい名品です。「雁塔聖教序」がひとたび世に出ると、この書風は一世を風靡し、多くの追随者を輩出することになりました。

蔡襄
1012~1097



黄庭堅
1045~1105



蘇軾
1036~1101



米芾
1051~1107



宋の四大家

趙孟頫
1254~1322

文徵明
1470~1559

董其昌
1555~1630

傅山
1607~1684

趙之謙
1829~1884

王羲之神話の崩壊

顔真卿とは

顔真卿は、山東省の琅邪臨沂の人。代々、訓詁と書法を家学とする名家に生まれ、唐の玄宗皇帝の治世になる開元22年(734)、26歳で官吏登用試験に及第し、4人の皇帝に仕えた官僚です。

天寶14年(755)、安史の乱が起こり、顔真卿とその一族は敢然と義兵を挙げ、唐王朝の危機を救いました。建中4年(783)、再び李希烈によって反乱が企てられると、顔真卿は宰相の盧杞の計略と知りながらも敵地に赴き、捕らえられて蔡州(河南省)の龍興寺で殺害されました。時に顔真卿77歳。顔真卿はのち忠臣烈士として尊ばれ、初唐の三大家とは異なる美意識のもとにつちかわれたその書は、後世の多くの人々にきわめて大きな影響を与え続けています。

三跡

小野道風
894~966

藤原佐理
944~998

藤原行成
972~1027

三筆

空海
774~835

嵯峨天皇
786~842

橘逸勢
?~842

第1章 書体の変遷

書体進化の秘密

中国の漢字は、読みやすさ・書きやすさ・美しさ等の要素を満たしながら形成されました。各要素の均衡は、社会の発展とともに変化します。そのため公式の書体は、篆書から隸書へ、隸書から楷書へと進化を遂げてきたのです。

第2章 唐時代の書 安史の乱まで

王羲之書法の継承と楷書の完成

唐王朝の基礎を築いた第二代皇帝・太宗は、博学で文芸に通じ、王羲之の書をこよなく愛しました。太宗に仕えた虞世南、欧陽詢、褚遂良は能書としても活躍し、王羲之書法の伝統を受け継ぎながら、楷書の典型を完成させました。



くせいなん
虞世南筆
孔子廟堂碑
唐時代・貞観2~4年(628~630)
三井記念美術館蔵

唐の太宗が長安の国子監に孔子廟を改築した際に建てた碑です。碑は唐末に失われ、原石拓本はこの一つしかありません。



おうようじゆん
欧陽詢筆
九成宮醴泉銘
唐時代・貞観6年(632)
台東区立書道博物館蔵

唐の太宗が九成宮に避暑した際、離宮の一隅に甘泉が湧き出した事を記念した碑で、欧陽詢76歳の作。楷書の最高傑作として知られています。



ちよすいりよう
褚遂良筆
雁塔聖教序
唐時代・永徽4年(653)
東京国立博物館蔵

玄奘の漢訳仏典に対して、太宗が序を、高宗が記を作り、褚遂良が揮毫したもの。唐の華やかさを盛り込んだこの書は、一世を風靡しました。



ちよすいりよう
褚遂良筆
黄絹本蘭亭序(部分)
唐時代・7世紀 台北 國立故宮博物院寄託

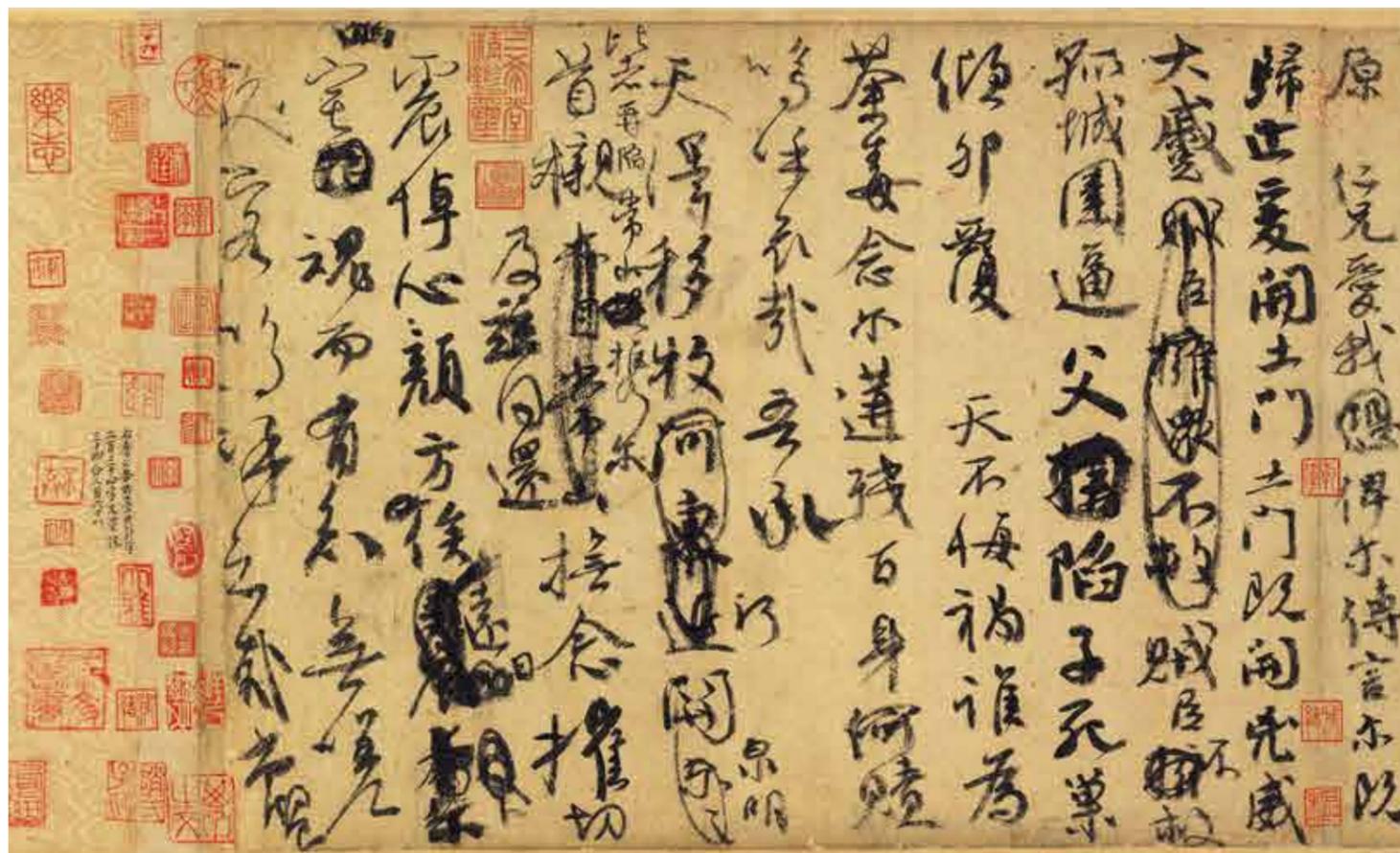
唐の太宗は能書の臣下に王羲之の蘭亭序を臨書させました。これは褚遂良の臨本として伝えられる作で、巻後には、近代日本の東洋学者である内藤湖南の跋文もあります。

第3章 唐時代の書 顔真卿の活躍

王羲之書法の形骸化と情感の発露

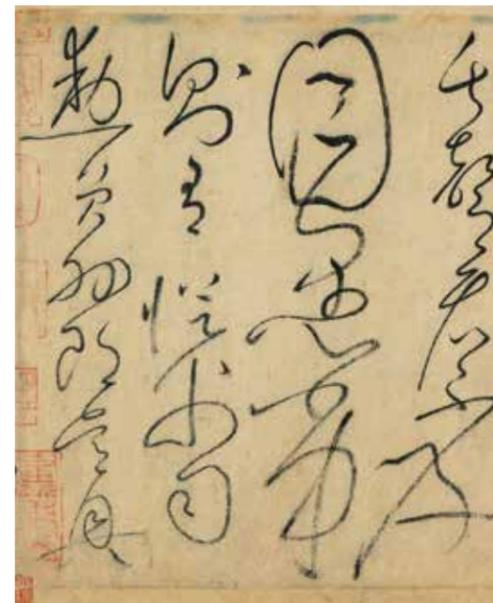
王羲之の書法は一世を風靡しましたが、安史の乱を境として次第に形骸化します。やがて伝統に束縛されず、自らの情感を率直に発露する機運が高まります。顔真卿はこのような意識の変化を、書の表現に見事に反映させました。

溢れ出る怒り—— 激情の書「祭姪文稿」



がんしんけい
顔真卿筆
千福寺多宝塔碑
唐時代・天宝11載(752)
東京国立博物館蔵

顔真卿44歳の筆になるこの碑は、初心者の手本として広く学ばれています。初唐の三大家の伝統に立脚する、リリしい書きぶりです。



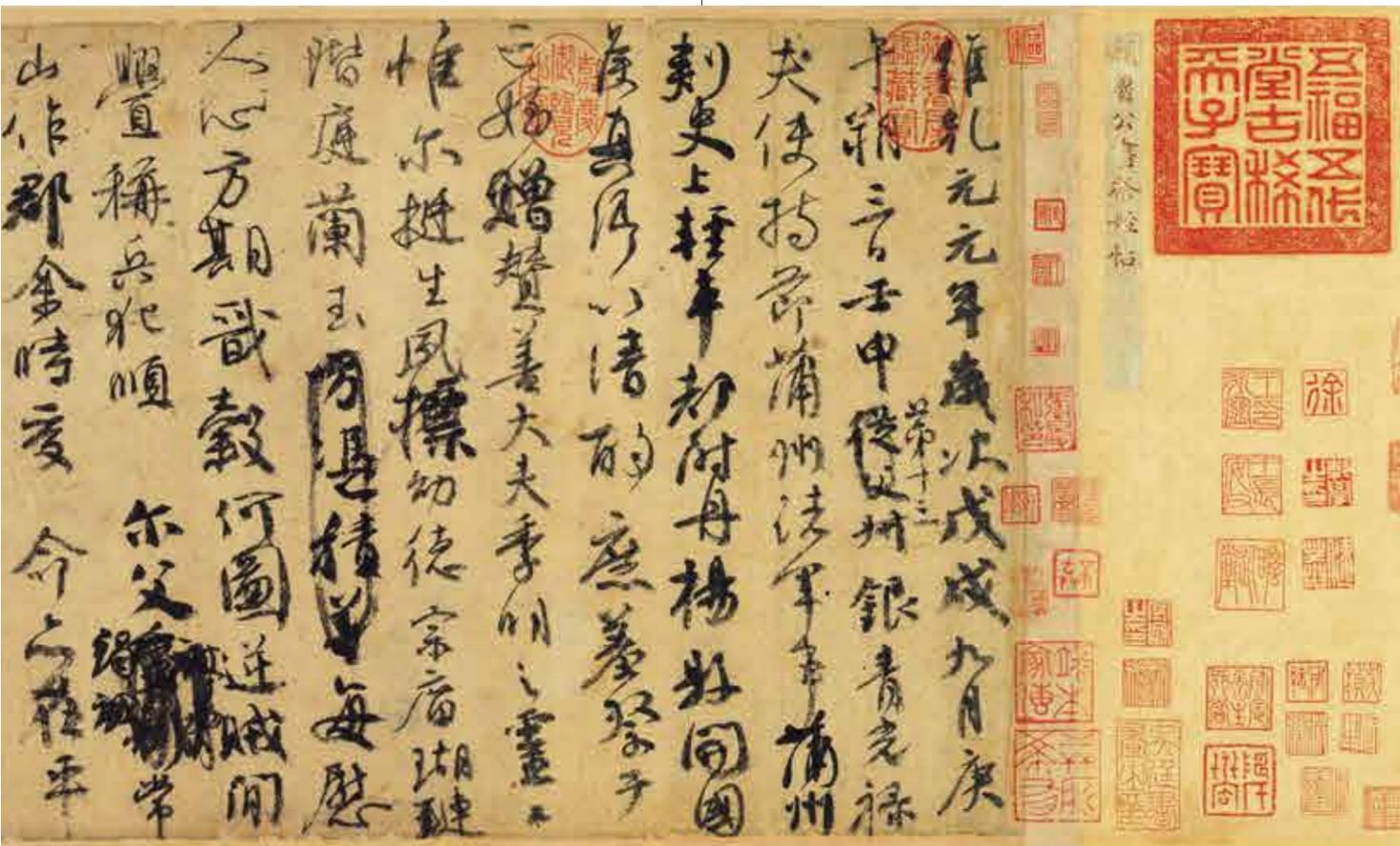
日本初公開

顔真卿筆 祭姪文稿

唐時代・
乾元元年(758)
台北 國立故宮博物院藏

755年に安祿山と史思明らによる安史の乱が勃発すると、玄宗皇帝は成都(四川省)に亡命し、唐の都長安は安祿山らに占領されました。内乱は8年の長きに及び、763年によりやく収束します。顔真卿は義兵をあげて乱の平定に大きく貢献しましたが、従兄の顔杲卿とその末子の顔季明は乱の犠牲となってしまいました。「祭姪文稿」とは、顔真卿が亡き顔季明を供養した文章の草稿で、悲痛と義憤に満ちた情感が紙面にあふれています。最初は平静に書かれていますが、感情が昂ぶにつれ筆は縦横に走り、思いの揺れを示す生々しい推敲の跡が随所に見られます。

日本初公開!!



懐素筆 自叙帖(部分)

唐時代・大暦12年(777)
台北 國立故宮博物院藏

僧の懐素は酒を飲んで自己を解放し、草書で胸懐を吐露しました。自らの学書の経歴を書いた本作も、狂おしい草書で変化の妙を尽くしています。

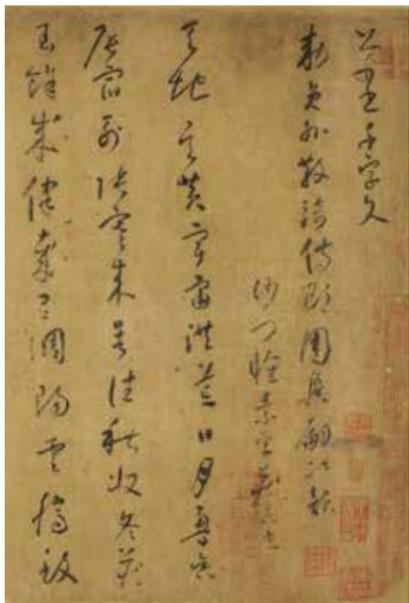
日本初公開



懐素筆 小草千字文(部分)

唐時代・貞元15年(799)頃
台北 國立故宮博物院寄託

「自叙帖」とは対照的な、熾し銀のような懐素の代表作。小ぶりの草書で千字文を書いたこの作は、一字一金と評され、「千金帖」とも呼ばれています。



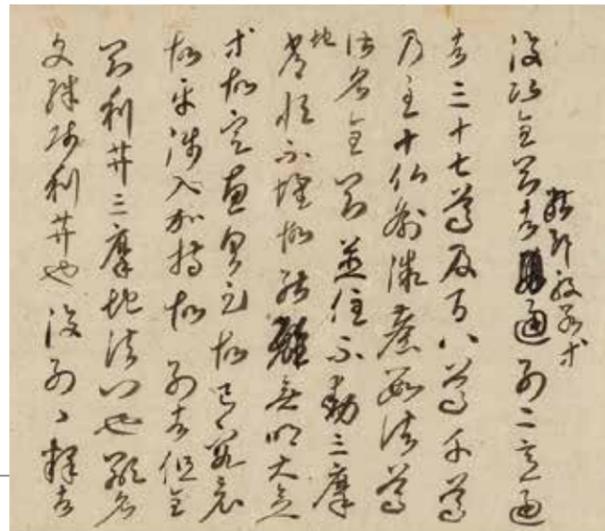
第4章 日本における唐時代の書の受容 三筆と三跡

平安時代初期に活躍した空海、嵯峨天皇、橘逸勢は、唐時代の書を通して、王羲之の書法を学びました。平安時代中期に活躍した小野道風、藤原佐理、藤原行成は、唐時代の書を学びながらも、日本独自の書風を开花させました。

空海筆 金剛般若経開題残卷(部分)

平安時代・9世紀 京都国立博物館蔵

空海が『能断金剛般若経』について、密教の見地から注釈を加えた自筆の草稿本です。空海がいかに唐時代の書を学んだかを窺うことができます。



第5章 宋時代における顔真卿の評価

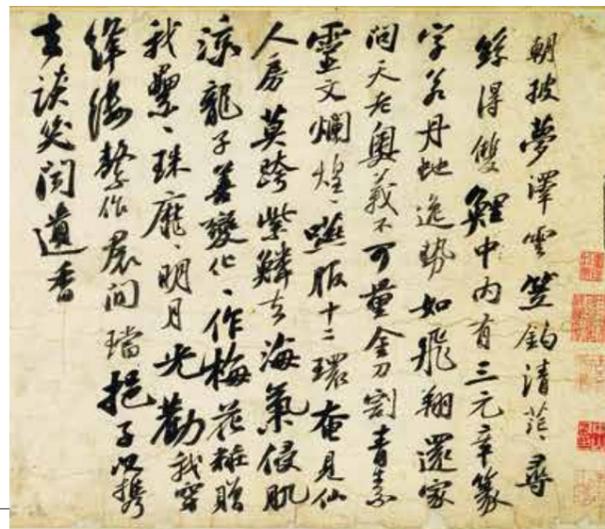
人間性の尊重と理念の探求

安史の乱を境として興った「情感を発露する書風」は、宋時代の士大夫たちによって受け継がれ、さらに発展しました。書は人間性によって価値づけられるという考えから、顔真卿の書が高く評価され、古人を模倣しない、個性的な書が尊ばれました。

蘇軾筆 行書李白仙詩卷(部分)

北宋時代・元祐8年(1093) 大阪市立美術館蔵

蘇軾が李白の作と伝えられる二首の詩を、蘆雁模様が施された美しい料紙に行書で揮毫した作。個性の表出に重きを置く、蘇軾の考えがよく表わされています。



第6章 後世への影響 王羲之神話の崩壊

王羲之の書法に根ざす伝統的な書と、個性的な書とは消長を繰り返しますが、清時代も19世紀を迎えると、真跡が存在しない王羲之の書法を学ぶよりも、青銅器や石碑の文字を学ぶようになります。ここに王羲之の神話は崩壊し、野趣あふれる書風が主流となります。

趙之謙筆 行書五言聯

清時代・咸豐8年(1858) 個人蔵

王羲之神話が崩壊した19世紀、趙之謙もはじめは顔真卿を学びました。その後、北魏時代の書に傾倒し、独特な筆法を用いることで、野趣あふれる書が創出されたのです。

